

●コレクション・データ

時代 室町時代

出土地 十六面・薬王寺遺跡

第15次調査

発見年 1998年

大きさ 面径9.8cm、厚さ0.5cm

展示位置 エントランス・「小窓ケース3」



唐古・鍵考古学ミュージアム

KARAKO-KAGI ARCHAEOLOGICAL MUSEUM

ミュージアムコレクション 52

わきょう
和鏡

唐古・鍵考古学
ミュージアム
【 ☎ 34・7100】

開館時間 午前9時〜午後5時（月曜は休館）
観覧料（カッコ内は20人以上の団体料金／15歳以下は無料）
▼大人 2000円（1500円）
▼高校生・大学生 1000円（500円）

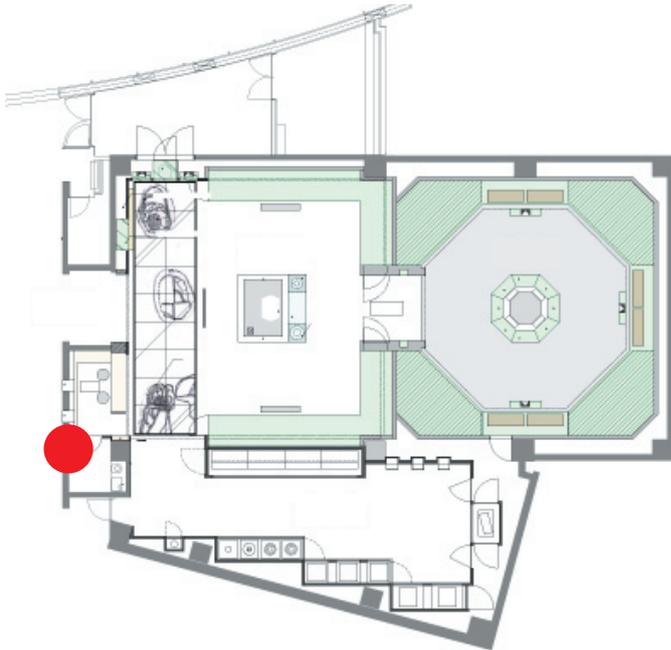
現在、私たちが使用する鏡の多くは、明治時代に普及した「ガラス鏡」ですが、それ以前は青銅製の鑄造された鏡が使われていました。今回は、そのような室町時代の「和鏡」を紹介します。鏡は顔を映す方が表面ですが、博物館では鏡の裏面、すなわち、文様のある面を見えるように展示しています。これは、この裏面に鑄出された文様や絵画が特徴的で、時代によって異なり、その図柄自体に何らかの意味をもたせていることが多いからです。

さて、今回の和鏡の裏面には、鳥・植物・砂浜の文様が鑄出されており、「洲浜双草双雀文鏡」と呼ばれています。いずれの図柄も古墳時代に見られる神仙世界の神獣のような図柄でなく、和風化したものです。中央部には、紐を通すための突出した楕円形の鈕が作られています。ここで、少し日本の鏡の歴史をさかのぼりましょう。日本には、弥生時代に朝鮮半島・中国から初めて鏡がもたらされ、古墳時代を通じてこの時代の鏡は「権威の象徴」を示すごく一部のの人たちのものでした。その後、平安時代後期にはシンブルなデザイン「和鏡」が誕生し、江戸時代には化粧道具として一般の人たちにも広がりしました。

このような「和鏡」は、化粧道具としてだけでなく、自らの姿を映した鏡に病氣治癒などさまざまな願いを込め、寺社に奉納しました。

今回の「和鏡」をX線で透過させると、直径3ミリほどの孔の痕跡が2ヶ所見つけられました。このことから、この鏡は、本来、どこかの寺社に奉納され、柱や壁に打ち付けられていた可能性が出てきました。それをどのような経緯で、この十六面・薬王寺遺跡の人が入手し、使い、投棄したかは謎です。

このように、鏡は単なる化粧道具でなく、鏡に神秘的な力を求める人々の願いが、この鏡を通して映し出すことができそうです。



ミュージアム上面図と展示位置